

ICFを用いた高齢者の生活機能低下の実態調査

○能登真一 (OT)¹⁾, 石川宏美 (OT)²⁾, 上村隆元 (Dr.)³⁾

¹⁾新潟医療福祉大学医療技術学部作業療法学科, ²⁾介護老人保健施設 尾山愛広苑, ³⁾杏林大学医学部衛生学公衆衛生学教室

Key words: ICF, 高齢者, (生活機能)

【はじめに】超高齢社会を迎えた今日、高齢者に対する作業療法のニーズはますます高まっているといえる。しかしながら、対象者である高齢者の機能や活動の実態、環境の影響について、系統立ててとらえたものは少ない。今回、われわれはそのような高齢者の生活機能を国際機能分類 (ICF) に則して整理することを目的に、ICFを用いた詳細な評価による実態調査を行った。

【方法】対象は新潟県内の介護老人保健施設などで入所あるいは通所により介護保険サービスを利用している高齢者52名である。評価方法は、対象者の属性評価やICF, FIMなどを網羅した評価表を作成し、現場の作業療法士が記入するものである。ICFに関しては、心身機能85項目、活動と参加152項目、環境因子76項目の合計313項目を今回の調査項目として選び、さらに活動と参加については実行状況と能力に、環境因子は促進因子と阻害因子にそれぞれ分けて評価を行った。評価尺度は0 (困難なし) ~4 (重度の困難) までの5段階で、評価点の目安は厚生労働省の評価点基準暫定案 (平成19年) に準じて評価を行った。ICFの項目ごとの比較には、以下の数式によりItem index (Ii) を求めた。 $Ii = \frac{\sum 0 \rightarrow 4(N(i) \times i)}{\sum N(i) \times 25}$ 。またICFによる評価とともに、FIMによるADL評価も併せて実施した。調査は平成19年10月から開始し、対象者に調査内容を説明した上で、同意を得て実施した。

【結果】対象者の平均年齢は76.6歳、性別は男性17名、女性35名であった。要介護度の分類では要介護度1-2名、要介護度2-13名、要介護度3-18名、要介護度4-12名、要介護度5-7名であった。FIMの平均は91.2点であった。ICFに関して、心身機能では歩行パターンの機能が最も障害がありIiで54、完全な機能障害を呈した対象者が32%となった。活動と参加については、一般的に運動と家庭に関連する項目の困難が多くなった。とくに前者では持ち上げて運ぶがIi 90、障害物を避けての歩行がIi92と高くなった。また実行状況と能力のIiに差が認められたものは家庭でのIADLに関する項目であった。環境因子では、家族や保健の専門職の促進因子としてのIiがそれぞれ83、65と高く評価された半面、サービス・制度で阻害因子のIiが42と高くなった。

【考察】本研究により、ICFに則した高齢者の生活機能の実態を明らかにできた。とくに活動と参加のIADL関連の各項目と環境因子の家族や保健の専門職という人的な部分については、作業療法が得意とする部分であるため、今後の重点的な介入ポイントとして注目していく必要がある。またICFについて、医療福祉現場で汎用されるためには、項目数が多いことや評価尺度がいまいであるといった数々の課題をクリアしていく必要があると考えられた。